

戦争のあったころ

昭和十二年、日本と中国の間に戦争が始まりました。

そして、昭和十六年には、ドイツ、イタリアとともに、アメリカ、イギリス、フランスなどを相手に大きな戦争をはじめました。

昭和十七年には、東京もアメリカ軍のばくげき機によって、こうげきをうけました。この空しゅうで東京を守るために、てきの飛行機がきたらすぐとび立てる飛行場が必要になりました。そこで、平らな土地で建物が少ない成増(今の光が丘)に、わずか四ヵ月というはやさで、飛行場が造られました。[\(成増飛行場\)](#)飛行場を建てるため、土支田・田柄・高松で合計六十六軒の農家が、六十日間で立ちのかなければなりませんでした。このため約二十万平方メートルの田んぼがなくなりました。

飛行場の周辺には、えんぺい壕や探照灯・高射砲の陣地・格納庫ができました。また、格納庫までの誘導路が畑をつぶして造られました。このころ、飛行場の排水のため、町の人たちで田柄川を掘って深くしました。

川のまわりの田んぼは、区画整理されて畑になりました。戦闘機が、七十一・九十機おかれ、夜中の十二時、三時と夜明けの六時にエンジンの調整が行われました。

近くの家では、エンジンの大きな音とほこりになやまされました。

昭和十九年になるとアメリカの爆撃機「B29」に体当たりする特攻機の訓練場となりました。

若者たちは、戦闘機に乗り「B29」に命を捨てて体当たりしました。

戦争のために使う物資をたくさん作るために、一般の人々の生活に必要な品物が不足するようになりました。米・みそ・しょう油・塩・マッチなど、わりあてのきつぷがなければ買えなくなりました。衣類や紙などもおもうように手に入らなくなりました。

少しの空き地や、道路にもさつまいもやカボチャを植えて、食糧のたしにしました。